

フロイトの影響について (2)

—アメリカ社会学研究の一節—

宇賀博

3

1931年5月14日、ドレスデンで第6回国際精神療法医学大会の議長をつとめていたチュービンゲン大学のクレッチメル教授は、フロイトの75回目の誕生日にちなんで、かれの業績をたたえる奥床しい賛辞をのべた。ニューヨークでは発起人が集まって、リッツ・カールトン・ホテルで二百人の客を招く宴会の準備をした。アメリカの指導的な精神医学者ウィリアム・A・ホワイトがおもな演説をしたが、そのほか、フロイトの翻訳家A・A・ブリル、アメリカの教育者ジュシカ・コスグレイヴ夫人、弁護士クラレンス・ダロウ、作家シオダー・ドライサー、法律家ジェローム・克蘭ク、経済学者アルヴィン・ジョンソンと多彩な人たちが演説をした。もちろん、お祝いの手紙や電報は山のように届き、そのなかにはアインシュタイン博士からのものがあつた。また、10月にはじつにうれしい出来事がおこつた。いまはプリポールとなつたフライベルクの市議会が、フロイトの生家に青銅の銘をつけて、フロイト(とじぶんたち)の名誉を記念することを決議したからである。しかしその反面、世界的な資本主義の経済危機が1931年には絶頂にたつし、そのポリティカルな結果は、フロイト個人にとつても、またドイツにとつてもオーストリアにとつても、やがて悲惨なものとなるのである。

その前年もずいぶん不快な年であつたが、1933年にはさらに一段と深刻な危機が生じた。フロイトは以前には第一次世界大戦の破壊と敵意が精神分析学へ対する興味を最小のものにするか、あるいは消滅させてしまうのではないかとおそれたことがあつた。今や、ヒッ

トラーの迫害が同じおそれをよみがえらせ、また事実、その迫害は精神分析学の故国—オーストリア、ドイツ、ハンガリー—に関する限り成功を収めた。彼はマリー・ボナパルトにこう書いた。「周囲のおそろしい出来事に注意を払わずに仕事に没頭できるとは、あなたは、何と幸福なことでしょう。我々の社会ですらすでに大きな震動がおこっています。人びとはドイツの国家主義的な無法行為が我々の小さな国にも及ぶのではないかとおそれています。私はスイスかフランスへ逃げるようにという忠告をすでに受けています。がそれは馬鹿気ています。私はここに危険が迫るとは考えていませんし、もし来ても、ここで危険を待ちうけるかたい決心をしています。もし殺されるとすれば—それもよろしい。それも一つの死に方です。しかし、おそらく、これは安易な自慢にすぎないでしょう。」

その十日後には、こう書く。「サンクルーへのご招待を感謝いたします。しかし、私はそれを利用させていただかぬことを決めました。その必要は、ほとんどいらぬでしょう。ドイツ国内の野蛮行為は減少しているようです。フランスとアメリカが示した反応はある影響を与えるのに成功しました。しかし、小さくはなりますが、それ故に苦しみの軽いとはいえない責め苦はやみそうになく、ユダヤ人を、そのあらゆる地位から剝奪して組織的に圧迫することはまだはじまつたかはじまらぬかというところなのです。

そのユダヤ人の迫害と知的自由の圧迫がヒットラーの計画中、唯一の実行可能なものであることを認めざるを得ません。その他は弱くてユートピア主義です。⁹⁹⁾ (そして、1937年の3月には、かれはこう書いている。「政治情勢は、ますます暗くなるようです。他のものと同様、精神分析学にも悪い結果をおよぼすでしょうが、ナチの侵入を抑えることはまずできないでしょう。私の唯一の願いはそれを見ぬうちに死ぬことです」と)。

1933年5月の末には、フロイトのものや他の精神分析関係の書物が禁書として、ベルリンで焼かれた。そして翌年には、ドイツに残っていた分析者はすべて亡命し、ドイツにおける精神分析学の「清算」がおこなわれたのである。

ジョーンズは、「今、振り返ってみると、かつてあれほど広くドイツ中に広がっていたフロイトとその業績に関する知識が、これほど徹底してほとんど完全に抹殺され、そのため、20年後、ドイツの水準がいまなお、たとえば、ブラジルや日本より低いことになったというのは驚くべきことである。当然、ドイツの事態はフロイトの大きな苦悩となり、反ユダヤ主義の偏在についての彼の悲観的な見解は一段と強くなった」⁴⁰⁾と、このようにのべている。そして、1938年3月11日におこったナチのオーストリア侵入は、ジョーンズの表現をかりれば、フロイトが故郷をすてて外国の地に逃れ、それにより、かれもまた、先祖たちが、あれほどいくども疲れた足でたどった道の後を進むことになる合図となった。フロイト、ロンドンに亡命。そこではイギリスで最高の礼をもって迎えられたけれど、しかし、かれはすでに不治の病におかされていた。「はじめのころ、たずねて来た人の中には、H・G・ウェルズ、博学なユダヤ人の歴史家で、フロイトにモーセの書物を出版しないように頼んだヤフダ教授、レーヴェンシュタイン公、アーノルド・ヘルリーゲル、R・ベルマン、シュテファン・ツヴァイク、有名な人類学者、マリノフスキー教授などがあり、ことにうれしい客は、フロイトがきわめて高い評価を下していた有名なシオン主義の指導者、シャイム・ヴァイツマンであった。マリノフスキーは、フロイトに、社会学協会が歓迎の意を表することを、6月17日の会議で決議したことを知らせた。そして「6月23日には、国王陛下御自身の要請以外には先例のない、きわめて異例の訪問がなされた。王立協会の三人の幹事、アルバート・シーワード卿、A・V・ヒル教授、グリフィス・ディヴィス氏が、協会の公式憲章書を持参し、フロイトの署名を求めた。この会見をフロイトは非常によこんだ。彼らはこの偉大な書物の写しを彼に贈呈したが、それにはなかならずく、アイザック・ニュートンとチャールズ・ダーヴィンの署名が見出された。」⁴¹⁾しかしながら、1939年9月23日、フロイトは亡命の身でおしまれて死んだのである。

はやくも『アメリカ社会学雑誌』(シカゴ大学刊)

は、その年の11月号にフロイトの特集を組んで、かれの業績をたたえた。たとえば、おもな目次を紹介すれば、

H. Ellis, Freud's Influence on [the Changing Attitude toward Sex; A. A. Brill, The Introduction and Development of Freud's Work in the United States; S. E. Jelliffe, Sigmund Freud and Psychiatry: A Partial Appraisal; G. Zilboorg, Sociology and the Psychoanalytic Method; E. W. Burgess, The Influence of Sigmund Freud upon Sociology in the United States; H. D. Lasswell, The Contribution of Freud's Insight Interview to the Social Sciences; K. Burk, Freud—and the Analysis of Poetry; W. Healy, Psychoanalytic Contribution to the Understanding and Treatment of Behavior Problems; K. Horney, What is a Neurosis?; F. Wittels, The Neo-Adlerians; Sigmund Freud: 1856-1939.

などがおもな内容であった。また、その翌年には、K・ヤングが「フロイト心理学の社会学への影響」(*American Journal of Orthopsychiatry*, 10, Oct., 1940)という論文を発表している。

ところで、フロイトが亡くなった1939年という年は、カレン・ホルネイが『精神分析の新しい道』(*New Ways in Psychoanalysis*)を書いた年でもあった。もっとも彼女は、その3年ほど前に『現代の神経症的パーソナリティ』(1936)を書いて、新しい方向を示唆していた。カレン・ホルネイ女史は1885年の生れ、フライブルク、ゲッチンゲンおよびベルリンの各大学で医学を学び、1918年までベルリン郊外のランクヴィッツで精神医学の実地修練をつみ、そして1920年からベルリン精神分析所の講師をつとめた。1932年、多くの分析者と同じ運命をたどって故国を追われ、アメリカに渡ってきた人である。彼女は、シュルツ・ヘンケやウイルヘルム・ライヒから影響をうけていた。⁴²⁾ホルネイによれば、「社会学者や人類学者の業績があげられた結果、最近では、われわれは文化(culture)という問題を単純には考えなくなったが、一九世紀には、文化の相違についての知識がほとんどなく、文明国人たる自己の特質を、一般的な人間性だと考える傾向が強かった。勢い、フロイトは自分が観察した人間、自分が解釈した

人間は、世界中に共通なものだと信じていた。彼のこの文化に対する不十分な見方は、彼の生物学的な前提と深いつながりがある。⁴³⁾そして、彼女は「社会学的に傾いた見方が、これまでの生理解剖学に傾いた見方に、とって代るのである」とのべた。すなわち、それは「新フロイト派」の宣言であって、この生物学主義からの解放は、よく知られるように、社会学や文化人類学や社会心理学といった領域で多くの異色ある業績を生んだ。たとえば、ホルネイ女史とならんで、新フロイト派のいま一人の驍将である E・フロムの『自由からの逃走』(1941) は、その代表的な業績の一つであった。

ファシズムが抬頭してきたとき、大部分のひとたちは、政論的にも実践的にも準備ができていなかった。いったい人間がこのような悪への傾向や力への渴望、このような弱いものの権利の無視や服従への慣れをもつことができるなどとは信ずることもできなかつた。ただわずかなひとたちだけが、やがて爆発する火山の鳴動に気がついた。ニーチェは一九世紀の自己満足的な楽観主義を警告した。マルクスもまた、べつの方法で警告をあたえた。そしてもう一つの警告が、少しおくれてフロイドからも発せられた。もちろんフロイドがかれの多くの弟子たちは、社会的現象については非常に素朴な観念しかもっておらず、またかれの心理学の社会的問題への適用は、大部分誤ったものであった。しかしフロイドは、その関心を人間の感情の精神的障壁にさきあげるにより、われわれを火山のいただきにつれていき、そのにえつつ噴火口をのぞかせたのである。

フロイドは人間の行動のさまざまな部分を決定する、非合理的な無意識的な力の観察と分析とに注意をむけたが、こうしてかれは以前のだれよりも一歩前進した。現代心理学においてフロイドとその後継者たちは、たんに近代合理主義がみのがしていた人間性の非合理的無意識的な部分をあばきだしただけでなく、これらの非合理的な現象も一定の法則にしたがっており、それゆえ合理的に理解することができることも指摘した。かれは人間行動における非合理性だけではなく、夢の言葉や身体的症状も理解できることを教えた。かれはこれらの非合理性は、人間の性格構造全体と同様に、外界からの、とくにごく幼い時期にあたえられた影響の反作用であることを発見した。

しかしフロイドはかれの属していた文化の精神によって、非常にゆがめられていたために、その限界からさらに進むことはできなかつた。まさにこれらの限界が病的な人間を理解するさいの限界となっていた。ま

たそれは正常人の理解にも、社会生活に起る非合理的現象の理解にも、不利な条件となった。⁴⁴⁾

たとえばリースマンは、『孤独な群衆』(1950) の新版の「序文」のなかで、このフロムからの影響をつぎのように述懐している。すなわち、「人類学者をはじめ、パースナリティと文化(あるいは C・クルックホーンと H・マレイの表現をかりれば“文化のなかにおけるパースナリティ”)に関心をもつ社会学者たちをもっとも強くシゲキしてきたのはこの精神分析的心理学なのであった。フロイトの性心理学的諸段階は K・アブラハムによって洗練され、あらゆる文化に“口唇的”とか“肛門的”性格という概念をあてはめることがこころみられた。つまり、歴史を理解するために生物学的な普遍主義を中心にするというのである。これと対照的に、わたしたちが『孤独な群衆』のなかでこころみたのは、——運命よりはせまいが——生殖性よりはひろい歴史的な問題を取り扱うことであった。こんなわけで、わたしたちは新フロイト派、とりわけ、わたしの学んだ E・フロムの伝統をうけついでいた。フロムの『自由からの逃走』と『自我のための人間』とは、歴史的変化の諸問題に社会的色彩の濃い精神分析的性格学を応用した例として、わたしたちには決定的な影響力をもったモデルであった。⁴⁵⁾そこには、二つの立場、つまり「歴史(あるいは文化)を理解するために生物学的な普遍主義」を中心にする立場⁴⁶⁾と「歴史的変化の諸問題に社会的色彩の濃い精神分析的性格学」を応用する立場、こういう異なった二つの方向のあることが指摘されている。そして、かれが書いているように、かれの立場はこの後者の方向にそっていた。

「文化とパーソナリティ」の研究は、サピア、W・I・タマス、ベネディクト、M・ミードなどの先駆的な業績が数えられるとはいえ、新フロイト派の一人、アブラハム・カーディナーの『個人とその社会』(1939)によって、その基本的な研究の方向が定められた領域であるといわれる。たとえばカーディナーは、精神分析の基礎のうえにたつて、文化と育児法との関係を重視し、パーソナリティ発達の順序として「育児法—基本的パーソ

ナリティ構造—投射の体系—現実的体系」を概念化した。これはすぐれた業績である。そして、「カーディナーの基本的パーソナリティ構造は今日の“文化とパーソナリティ”研究の大よそのあり方を決定づけたものであって、リントンの身分パーソナリティ (status personality) の概念も、コーラ・デュボア (Cora Ou Bois) のモーダル・パーソナリティ (modal personality) の概念もカーディナーの説に依存してつくられたものである。かれによる理論を理解することなしには現在のこの領域の研究の性格をよく理解することはできない。そしてそのことは、現在の多くの研究が精神分析学の影響下にすすめられているということの意味する」⁴⁷⁾のものであった。かれはそのほか、『社会の心理学的辺境』(1945)を書いたが、その同じ年、文化人類学者で著名なラルフ・リントン——カーディナーの共同研究者でもあった——は『パーソナリティの文化的背景』(1945)——邦訳『文化人類学入門』、創元社、1952——という名著を出版した。第二次大戦の終わった年であった。そして、そこに提出された「ステイタス・パーソナリティ」の概念は、社会学的にみても、きわめてすぐれた概念であった。

リントンによれば、「……社会の文化に対する個人の関与は、偶然によって決定される問題ではない。それは主として、又外面的文化に関する限りでは殆んど完全に、その社会における彼の地位と、その地位を将来占めるといふ予測のもとに彼が受けた訓練とによって決定される」のである。「多くの社会学者は、社会を制度というものから説明し、その諸制度相互の関係を示すものとして社会構造 (social structure) という言葉を用いている。しかし、実際は、一つの制度は諸々の文化型からなる一つの綜合体であり、それは一つの全体として或る一定の機能を果している。従ってそのような綜合体相互の関係は、主として文化の組織或いは統合という領域に属する。又、社会を制度の上から研究して行くことは、或る目的のためには役立つかも知れないが、制度と個人との関係を無視しがちである。」⁴⁸⁾だから、パーソナリティの研究に役立つしめるためには、社会構造の定式化は「社会的文化的綜合体のもう一方の側面」か

らなされる必要があるだろう。つまり、社会を構成する個人がどのように分類され組織されているか、という側面からである。

また、かれによれば、「パースナリティの研究に役立つような社会構造の定式化をすすめる際に、第一に明らかにしておかなければならないところは、どんな種類の社会単位が文化への個人の関与を決定する上に最も重要であるかということである」といい、そして、かれは「基本的社会」なるものを構想している。すなわち、「あらゆる人間は、通常、次のような社会のメンバーとして生活するものといえる。即ちその社会とは、両性及びあらゆる年齢の個人によって構成され、子供を生み、且つその子供達を社会組織の機能的メンバーとしての地位を得るように訓練することによって、継続されるものである。家族という別のタイプの組織集団は、これよりも更に起源が古いかもしれないが、このような社会も、たしかに、我々人類が初めて一つの種族として認められた時代にまで遡って考えられるものであり、家族と共に、人間の存在する所には必ず見出されるものであろう。このような社会のメンバーは、多くの共通の利害、及び個人的な親交と個人的な相互作用に基づいた強烈な仲間の意識によって結合されている。彼等は、外に対しては一つの単位であり、内においては一定の型に従って集団の福祉に必要な諸活動を分担している。この型は、その集団のすべてのメンバーが、奉仕を捧げると共に福祉を享けることを保証する。更に、各々の役割に応じてその行動は異っていても、このような社会のすべてのメンバーは、同じ一連の文化型特に内面的文化型を分有し、共通の価値体系を認めている。そして、この完全に分有された文化の中核が伝達されることによって、その社会のメンバーには共通の思想が与えられ、又その社会は、成員の不断の交替にも拘わらず存続して行くことができるのである。」そして、この単純な基本的社会といえども、たんなる個人の集合体でなく、その社会全体に比してより小さな、内部に組織をもった集団の集合体でもあるとのべ、「すべての基本的社会は、それが独立して存在するものであると、より高次の統一体の一単位として機能するものであるとを

問わず、その組織において若干の共通の特徴を有している。即ち、あらゆる基本的社会は、第一に、その成員を年齢と性の相違に立脚した様々な範疇に分けている。第二に、或る種の個人や個人の集団を、それが占める専門の職業に基づいて、その社会の他のメンバーから区別している。第三に、常にその組織の中に、より小さな、それ自身の組織をもった単位を含んでおり、それは次の二つの種類に分けられる。(1) 家族集団 (family group)。この集団は、実質上或いは形式上の血縁関係に基づいた成員から成っている。(2) 協同集団 (association group)。この集団は、共通の気持か共通の利益、或いはその両者に基づいた成員から成っている。第四に、すべての基本的社会は、その社会の個々のメンバーと、右のような組織体系によってつくられた単位としての集団とのいずれをも、それぞれの社会的重要性やそれに伴う影響力に応じて、上下関係の系列 (prestige series) の中に配列する傾向をもっている。⁴⁹⁾そして、このような基本的社会における分類と組織の各体系は、それぞれ個人がそこにおいてしめる status にもとづいて個人に特定の文化パターン——つまり、「役割」(role)——を課するのである。だから、うえのような考え方のもとに「ステイタス・パーソナリティ」が発想され、それがカーディナーの基本的パーソナリティ構造とは別に、あるいはそれのうえに重ねられ、それと完全に組合わされて考えられてくる。このように、その基本的な社会に共通な基本的パーソナリティ type のほかに、基本的社会内部の地位あるいは役割と結びついた反応の綜合体として、ステイタス・パーソナリティ type がリントンによって概念化された。そして、これら文化人類学の諸概念は、クーリーや G・H・ミードなどのシカゴ学派の社会心理学の諸業績とともに、第二次大戦後のアメリカ社会学に大きな影響を与えることになった。

たとえば、パーソンズのフロイト理論のとり入れ方にしても、とりわけフロイトの「超自我」の概念に媒介させて、社会学思想のうえからみれば、新カント派的な観念論への橋渡しに利用している一面をおもわないではないが、しかしそれにもか

かわらず、大筋でアメリカ的な経験的思考の伝統をふまえているという点では、うえのような社会心理学や文化人類学の文脈ののっかってフロイトの吸収をやっている。パーソンズは、フロイト理論について、「たぶん、知識階級のイデオロギー的欲求と結びついた幾つかの理由のために、フロイトの仕事の解釈における第一の強調——少なくともアメリカにおいて——は、個人の可能的な欲求の力とそのフラストレーションの有害な結果におかれる傾向があった。そういうわけで、最近のフロイト生誕百年祭でも、多くの人たちがこの結果について語っていた。こんな傾向があったから、フロイトは心理学と生物学的諸科学とを密接な関係においた心理学者として説明され、また社会と文化は、それが人間の本能的な欲求の欲せざるフラストレーションの原因であるというばあいを除いて、相対的に重要でないと考えられる傾向にあった」とのべ、さらに、「しかしながら、フロイトのものの考え方にもう一つの側面があるのではないか。それは、私見によれば、かれの理論的な凶式の複雑な進化の過程で、つまり、イド、自我および超自我というパーソナリティの構造分化を扱っている著作や晩年の不安のとり扱いなどにおいて、ぜんじより有力になってきている側面がそれである。この傾向というのは二つの主要なテーマに関するもので、すなわち、一つの体系としてのパーソナリティの組織と、個人とその環境との関係とくにパーソナリティ発達の過程、こういう二つのテーマに関する。これは精神分析の用語でいえば“対象関係”(object-relations)の分野——つまり、個人のパーソナリティについての精神分析理論と社会体系の構造と機能についての社会学理論とのアーティキュレーションの重要な領域である」と。⁵⁰⁾そして、かれのばあい、small scale の社会体系としての「家族」と、そこにおけるゴドモの「社会化」(socialization)の問題を中心に、そのアーティキュレーションが論じられている。

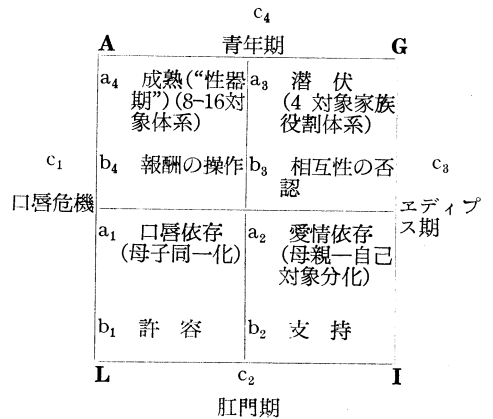
かれによれば、この点で、もっとも重要なフロイトの概念は、identification, object-cathexis, internalization または introjection, および the superego の諸概念であるけれど、もっとも注

目されるのは超自我 (the superego) の概念である。⁵¹⁾ つまり、社会の規範的な文化の内面化 (internalization) の問題であった。すなわち、「パーソナリティの中での価値の内面化は、……社会体系の中での価値の制度化と直接好一対をなす対照的なものである。……この二つのものは、実に、同一物の二つの側面にほかならない。この価値の型の制度化と内面化こそは、独立していても一つに結びついたものであり、フロイトによって発見された観点とデュルケムによって発見された観点の二つの異なった観点から結びついて一つになったものなのであって、行為理論の多くの中心的な理論的な問題の焦点なのである。」⁵²⁾ さらに、その重要さについて、かれはつぎのようにも表現している。この分析がそれによって組立てられている最も重要な思索は、フロイトの internalization の見解と、それとは別個に、あるいは同時に社会学の側で、フランスのデュルケムや、アメリカのチャールス・クーリーやジョージ・ミードなどが発展させたそれらとのあいだに著しいコンバージェンスがあること、このことによって与えられている。わたくしは、このコンバージェンスを現代の社会科学の数少ない真の記念碑的な発展の一つとみなすものである。なぜなら、このコンバージェンスは、メンデルの伝統における実験的な繁殖の研究と生物遺伝の媒体としての染色体の概念がそこから発展した細胞分裂のミクロ的研究とのコンバージェンスに、おそらく匹敵するだろうからである。現代の genetics は、この二つが一緒にあって生れたのである、と。⁵³⁾

パーソンズは、R・F・ベイルズとの共著で『家族—社会化と相互作用過程』(1955) を著わしているが、とくにその第二章の「家族の構造とコドモの社会化」で、行為の理論とフロイト理論を結びつけることによって「社会化過程」の局面=パターンを図式化することを試みている。それを少し紹介しておく、(1) 社会化の過程 (パーソナリティ発達) の順序は、ここではくわしくのべられないけれど、ベイルズの考えた「課題逐行」の逆の順序 (L→I→G→A) で展開されること、⁵⁴⁾ (2) この社会化の過程の局面=パターンは、二つのタイプ、すなわち相対的な安定の局面 (a₁—a₄) と不安定な転換 (過渡) の局面 (c₁—c₄) の二つの dynamism から構成されていること、および (3) この社会化

の過程は、理論図式としては、社会的作用をとおしての「社会的役割対象の内面化」という、G・H・ミードふうな役割取得の概念が利用されていること、こういうことなどをあらかじめの前提として、パーソナリティ発達の過程をフロイトの精神分析の用語を用いて説明するのである。すなわち、

まず胎児は、母親の胎内の安定した局面から分娩——これは、パース・チャンネルをとおるときの異常な



- 注 a (1—4) 心理・性的発達の局面
 b (1—4) 学習・社会統制過程の局面
 c (1—4) 転換 (過渡) 期

緊張と新しい環境との生理学的な相互作用 (呼吸・栄養摂取・排泄など) のメカニズムが急に活動を開始するという二重の意味において「出産外傷」とよばれるが——によって、いわゆる乳幼児 (口唇依存 a₁) となるが、この最初の不安定な転換の局面は、口唇危機 (c₁) とよばれている。つぎにこの口唇危機をへて口唇依存の相対的な安定の局面 (a₁) に移るけれど、この口唇依存は社会的対象——とくに母親への「愛着」(愛情定着) がその大きな特色となっている。この時期ではまた、幼児は母親の所有物であって、いわゆる「母子同一化」(mother-child identification) とよばれるのがそれであるが、ここでは自我意識はまだなく母親と自己を同一視して、この関係がうまくゆくことは、のちにパーソナリティが安定するための第一条件であるとされている。やがて、母親=対象の内面化が相互作用をとおして進行して、“you” (母親の “イメージ”) と “me” (自己) が分化しはじめるけれども、その契機は排便のシツケ (sphincter-control) なのである。この不満な転換の時期は肛門期 (c₂) とよばれ、つぎにこの肛門期をへて相対的な安定がつづくが、これは愛情依存の時期 (a₂) である。この愛情依存は、口唇依存のときの「同一化」(第一次の同一化) とはちがって、少なくとも “you” から “me” が分化して対象 (母親) への積極的な愛をもちはじめるという点で、対象への真の定着 (two object-attachment) で

あるとされる。しかし、このばあいの愛情定着の対象は、相変わらず母親なのであって、この意味において、この母子体系は社会学的には2役割体系(母親・自己)の社会的相互作用として概念化される。ところが、この社会的相互作用をとらえて社会的役割対象の内面化がさらにすすむにつれ、前段階の“you”が「母親」と「父親」の二つに分化し、その“me”も「自己」と「兄弟姉妹」の二つに分化してくるが、この分化の契機はエディプス・コンプレックスで代表される過渡の局面(c₃)であって、やがて4役割単位(母親・父親・兄弟姉妹・自己)の家族体系ができあがるのである。これは時期としてはフロイトのいう潜伏期で、家族依存の相対的な安定の局面(a₃)である。最後に、この家族依存を放棄して家族外の体系(extra familial system)への参加によって定着からの独立が迫られるけれど、これは一般に青年期(c₄)とよばれ、フロイトが成熟(「性器期」とよんだのは、この転換の過程のノーマルな結果(a₄)に名づけたものであった。ここではパーソンズは、8-16役割=単位の体系をパターン変数の組合せで図式化しているが、しかしそれは、社会学理論としては、いまだ完成されていないのではなか。

また、社会統制の過程(b₁-b₄)というのは、まず欲求=性向の表示を全面的に許容(b₁)し、つぎに、もっとも低いレベルの規範にしたがうことを“たとえ失敗したとしても”支持(b₂)を与え、そしてじょじょに規範の正統化をはかり、他方では一方的に欲求=性向に制限を加えて相互性の否認(b₃)をおこなう。そして最後に、規範の尊重にたいしては報酬の操作(b₄)によって社会的承認を与え、そうして社会体系の存続や維持をはかるといった図式である。⁵⁰⁾

また、ライト・ミルズもフロイトの影響を二つの点に要約して、つぎのようにのべている。たとえば「第一に個人有機体の生理学は克服され、おそるべきメロドラマの舞台である小家族集団の研究がはじまった。フロイトは予想もされなかった——医学的——見地から、家族内での個人の分析を発見したのであった。もちろん人間に対する家族の“影響”は気づかれていたが、フロイトの見方では家族が社会制度として、個人の内面的性格と生の運命にとって本質的なものとされた点が新しいのである。」また、「第二に精神分析の視角における社会的要素が、とくに超自我にかんする社会学的研究というべきものによって大きく拡張された。アメリカでは精神分析の伝統に、G・H・ミード(G. H. Mead)の社会行動主義における初

期の成果に発する全く別の系譜が合流した」⁵⁰⁾と。しかしミルズは、「そのさいある制約またはためらいが植えつけられた」ことをいみじくも指摘している。つまり、一般に「個人間の関係」というスモール・スケールの仕組みは考察されているけれど、「その関係そのもの、ないし個人そのものを位置づけている巨視的な文脈」はあまり考えられていない、というかれの批判である。そしてそれは、直接パーソンズ一派にむけられてもいい批判であった。ミルズじしんはフロイトの系譜に属していた。だから、いちおうは同一の前提をふまえていても、フロイトの影響には大きく「二つの流れ」があるようにおもわれる。

さて、わたしたちは、パーソンズがフロイトの「超自我」の概念をたいへん重視しているというふうのべておいたが、そのこととか、うえのミルズの批判は、さらにパーソンズの voluntaristic 社会学思想にそって考えるなら、それがどういう意味をもつかがいっそうははっきりするだろう。すでにみたように、パーソンズは、フロイトの「超自我」の概念と、G・H・ミードの「他者の役割取得」や「一般化された他者」の概念と、それにもう一つ、デュルケムの“Society exists only in the minds of individuals”という洞察の三つを同じ仲間に入れて、等符号で結ぶというような、奇妙な操作をやったのである。たとえばデュルケムの見解について、「この主題についてのデュルケムの洞察は、フロイトのそれよりかやや早かった。デュルケムのばあい、個人はその社会のメンバーとして、かれ自身の道徳的決定をまったく自由にするのではなく、むしろある意味で、かれがそのメンバーの一人である社会に共通な志向(orientation)を受け入れるように“拘束”されている、という洞察から出発していた。かれは、この強制の性質について一連の説明を企てて、ついに、この現象には二つの重要な特徴が中心になっているという結論にたつた。すなわち、まず第一に、道徳的な諸規則は、なんらかの外部的な力よりも、たいへん基本的には道徳的な権威によって行動を“拘束している”ということ、それから第二に、道徳的な権威の効果は、わたしたちがいまのべようとしているように、価値

パターンがパーソナリティの部分として内面化されるという仮定をもつことなしには、説明されえないということ。けっきょく、この二つに集約された。デュルケムは、いま説明する必要がないけれど、特別な用語法をつかって、“社会”そのものと道徳的規範の体系とを同一視するような傾向があった。このような社会という言葉の特殊な意味において、デュルケムは“Society exists only in the minds of individuals”という公式を明確にのべたが、それは重要なことである。⁵⁷⁾そして、パーソンズによれば、デュルケムがこの洞察を最初に明確にしたのは、*Détermination du Fait moral, in Revue de Métaphysique et de Morale*, 1906の論文で、それからさらに、かれの最後の著書 *Les Formes élémentaires de la Vie religieuse*, 1912のなかで発展させられた、というふうに書いていた。

これは、いったい、どういうことなのだろうか。ヒューズのいうように、「いちばん実証的傾向の強い存在であったデュルケムは、漸次その内実はまったく観念論的な立場へと進んでしまった。」つまり「デュルケムは実際に、社会は“個々人の心のなかにもみ……”存在するという見解を吐くところまでいっている。“実証主義の苦役をのがれんとして”かれは“あまりにも進みすぎ”、“すっかり観念論のなかへ”入りこんでしまった⁵⁸⁾のである。まことにアイロニカルな帰結であるといわねばなるまい。そして、じつはかくいうヒューズじしん、パーソンズの『社会的行為の構造』(1937)に影響されてそう解釈したのであった。だから、ぎゃくにいうならヒューズの「意識と社会」という発想は、その意味で、パーソンズの難解な社会学思想をヨーロッパ思想の流れとの関連で理解するいとぐち——いま、かりにヒューズの「意識」(consciousness)とパーソンズの voluntaristic な社会学思想をイコールとおくなら——を、わたしたちに与えてくれているようである。しかし、それはそれとして、たとえばパーソンズの voluntaristic な社会学思想——わたしたちは啓蒙の子であるという、ヒューズの「意識」の叙述の立場とはちがって——は、きわめてロマン主義的で ethical な色彩を濃くしているし、また、か

れの『社会的行為の構造』は、よく知られているように、そういう秩序や価値をもとめるような仕方でも展開されている。だから、そういったパーソンズに、かれのデュルケム解釈にくわえて、フロイトの「超自我」の概念は、恰好の材料を提供したものであった。そしてそれが、構造—機能分析と結びついたとき、私見ではあるが社会学思想史のうえからは、一九世紀ヨーロッパの反動的なロマン主義思想のアメリカ版——封建制欠如のアメリカ社会では、そういう思想は、ときどきコミュニティ規範へのコミットという「文化人類学的な偏向」(anthropological bias)の形態をとるばあいがあるが——といったニオイがしはしないだろうか。それは、30年代の危機を背景として発想されている。

しかしながら、こういうイデオロギー的解釈をぬきにするなら、うえのような着眼は、パーソンズじしんの少しオーバーな表現をかりるなら、「現代の社会科学の数少ない真の記念碑的な発展の一つ」である、ということである。なぜなら、ガスやミルズも、その意味で、似た出発点にたっていたからである。たとえばかれらも、「わたしたちは、ミードの一般化された他者の概念やフロイトの超自我の概念——両者のもっとも密接な接点——によって個人的なものと社会的なもの、すなわち、個人の内的行為と広汎な社会・歴史的現象を結びつけることができる」。またじじつ、「超自我や一般化された他者にかんする研究は、こんにち、わたしたちの研究の growing edge にある。というのは、かかる概念によって、わたしたちは個人の奥深い特性と広いパースペクティブにおいて存在する諸事実とを結びつけることができるからである⁵⁹⁾」と、このようにのべていた。

とはいえ、根底でパーソンズとミルズのあいだには社会心理学観の対立があって、高橋徹は、それをつきのように表現している。すなわち、

社会心理学の嚮導理念をもっとも直截な形で反映しているのが、この科学に付されている「限界科学」という性格規定であることについては、あえて贅言をついやす必要はなからう。ところで、すでに一般的用語法でも承認されているように、この限界性格という概念は、一方において無性格、無国籍、雑居性という

マイナスの価値志向を意味すると同時に、他方、二極間の媒介、結節、調和というプラスの価値志向をも含んだ両価の概念である。ということは、社会心理学の嚮導理念をめぐる、両価性の問題が光にともなう影のような形でつねにつきまわっているという意味でもある。このことを比較的明瞭な形で示しているのが、現代アメリカ社会学の両巨峰であるパーソンズ(Talcott Parsons, 1902-)とミルズとの間の社会心理学観の対立である。すなわち、パーソンズは、社会心理学をもって、心理学(体系としてのパーソナリティの基本的過程がその組織に関する科学)と、社会学(社会体系の価値志向型の制度化という現象に関心をもつ理論)との間の「割け目を埋める媒介領域」(interstitial mediating field)の学問と規定し、それを最近自然科学の分野でめざましい活躍ぶりを見せている生化学や心理生理学の地位に比している。しかし、こと理論科学としての斉合性や体系性という点に関しては、心理学や社会学とはとうてい比肩することのできぬセカンド・ハンドな理論というふうに断定している。他方、ミルズもまたそれをもって、心理科学と社会諸科学との間に架橋する役割を担った「臨界学問」(borderline discipline)とみなす点では、パーソンズと同様であるが、しかし、この架橋にかけたミルズの期待と構想はパーソンズのそれとはかなり対照的である。というのも、ミルズはかれの構想する「社会=歴史心理学」(social and historical psychology)こそ、「全体主義政府の台頭、人種的相対主義、人間における非合理性という潜勢力の発見、人間の歴史的変容の迅速性」などの現代的問題によって挑戦されてきた啓蒙主義的伝統の中核理念、つまり「人間の自然の本質」(the nature of human nature)に関する理論の復活を企てるものというふうに考えているからである。そのかぎりでは、社会心理学は今日的状況における「人間学」の旗手だというわけである。要するに、パーソンズとミルズとの間にみられる対立は、社会心理学をもって、オリジナルな理論科学としての資格を欠いた「雑炊科学」とみなす考え方と、逆に、それをもって、錯綜した現実における人間性の総合的把握をめざす「基礎科学」と考える見方との間の葛藤である。⁶⁰⁾

ガースとミルズの思考のプロセスを参考までにしめすなら、それは、こういうことである。かれらによれば、社会心理学の分野でどういうアプローチをしようとも、すべて当面する主要な仕事は、「二つの基本的な伝統、つまり性格構造の側のフロイトと、社会構造の側の、1848年代の初期のマルクスをふくめたマルクスのいずれかにフィットしているという考え方」からどうしても逃がれ

ることができないのではないかというのである。もちろん、「わたしたちは、“フロイト”と“マルクス”という二つの言葉に大文字からはじめない形容詞をつかっている。」すなわち、フロイトやマルクスの著作をさしてでなく、かれらの業績の偉大なパースペクティブや偉大な中味をさしてそういつているのである。それだから、「もし読者が好みなら、G・H・ミードとマックス・ウェーバーの名前をつかっても」、そして、かれらは多くの重要な点においてフロイトやマルクスとちがってはいるけれども、「わたしたちとしては、さして反対は唱えないつもりである。」また、「わたしたちが、くり返しくり返し、ジークムント・フロイトとジョージ・ミードを引っぱりだすのは、かれらが他の人たちとはちがってもっとも効果的に、全体的な行為者としての人間——一組の特徴や反射の束としての人間の代りに——を、わたしたちにしめしてくれているからである。フロイトの貢献は、より大きなフレーム・ワークのなかで、人間の自然(human nature)の本質についての問題を提出したことであった。また、社会学の側から、くり返しくり返し、マルクスやウェーバーといった人たちを引っぱりだすのは、かれらが、全体としての社会を歴史的エポックのなかに少なくとも位置づけているという理由からである。」

そして、かれらによれば、「構造的な社会学者や深層心理学者は、ともに現代人——そして、わたしたちじしんをも含めて——を歴史的な行為者として位置づけることを、わたしたちに約束してくれている。この約束は現代の社会心理学者たちを動機づけているものであるが、かれらの当面の理論的な仕事は、二つのそのようなパースペクティブ——性格と社会構造についての——の有効性によって、また、人間をその本質から、しかも一人の歴史的な行為者としてみようとするかれらじしんの欲求によって、だんだりされている。もし社会心理学者たちの仕事がこの二つのパースペクティブをめぐって仕上げられ、かつその二つを結びつけることであるとするなら、この分野における最近の仕事の理論的な意義は、したがってつぎのように評価されるだろう。すなわち、具体的な研究はこれら二つのいずれかに貢献するものであ

るし、しかもその growing edge においては、人間と社会についてのワーキング・モデルとそれらをつなげるのに貢献すると考えられる。⁶¹⁾だから、さきのガースとミルズの立場、つまり「わたしたちは、ミードの一般化された他者の概念やフロイトの超自我の概念——両者のもっとも密接な接点——によって個人的なものと社会的なもの、すなわち、個人の内的行為と広汎な社会・歴史的現象をつなげることができる」という立場は、うえのようなかれらの思考のプロセスを前提として、はじめて真の意味がわかってくる。そして、そのような理解にたつならパーソンズの「現代の社会科学の数少ない真の記念碑的な発展の一つ」というさきほどのいい方も、けっしてオーバーな表現ではなかったのである。

注39) ジョーンズ、前掲書、486—487ページ。

40) 上掲書、491ページ。

41) 上掲書、516ページ。

42) フロイトとライヒの関係について、つぎのような話がある。1932年のことであった。「ヴィルヘルム・ライヒは『雑誌』(Zeitschrift)に発表する論文を送ってきたが、それはマルキシズムと精神分析学を融合するという問題を扱ったもので、フロイトによれば、「我々が死の本能とよんでいるものは、資本主義体制の産物であるというばかげた結論をその中心とする」ものであった。これはもとより、その本能が動物にせよ、植物にせよ、あらゆる生物に内在する一傾向を作っているというフロイトの見解とはずいぶんちがっていた。フロイトは当然、精神分析学の側からみた一切の政治的関心を否定する編集者の意見を加えたいと希望した。ライヒ自身はこれに賛成したのであるが、アイティンゴン、ルードライヒ・イエケルス、ベルンフェルトなど、フロイトが相談した人はこれに反対した。何とベルンフェルトはこれに連帯する宣戦布告に等しいことになるとうたったのである。この問題は、ライヒの論文は雑誌に載せが、そのあとにベルンフェルトのくわしい批判をつけるということで最終的な解決をみた」(ジョーンズ、前掲書、482ページ)と。

43) K・ホルネイ『精神分析の新しい道』井村・加藤訳、日本教文社、1952、27ページ。

44) E・フロム『自由からの逃走』日高訳、創元社、1951、15—16ページ。

45) D・リースマン『孤独な群衆』加藤訳、みすず書房、1964、3ページ。また、かれの協力者の一人、ルーエル・デニーは、「この書物は、パースナリティ形成の過程については、フロイト説に大きく学び、西洋産業主義におけるプロテスタントのエトスの支配については、マックス・ウェーバーの思想に学んでいる」といつていた。(スピラー

他編、前掲書、125ページ)

46) フロイトじしんの社会的ないし人類学的な問題への関心について、たとえば、「1913年に出版された『トータルムとタブー』は、フロイトがはじめて精神分析学の知識を社会的な問題や人類学の問題に適用した本である。この本に続いて次のような一連の著作が出版されている。すなわち、『集団心理学と自我の分析』(1922)、『幻想の未来』(1930)、『文明とその不満』(1930)、および『モーゼと一神教』(1939)である」と。(ブラウン、前掲書、173ページ)

47) 築島謙三『文化心理学基礎論』勁草書房、1962、206ページ。

48) R・リントン『文化人類学入門』清水・犬養訳、創元社、1952、77ページ。

49) 上掲書、82—83ページ。

50) T. Parsons, "Social Structure and the Development of Personality: Freud's Contribution to the Integration of Psychology and Sociology", in his *Social Structure and Personality*, Free Press, 1964, pp. 78-79.

なお、この関係のパーソンズの論文としては、「Psychoanalysis and the Social Structure», *The Psychoanalytic Quarterly*, 19, 1950. あとで *Essays in Sociological Theory* の改訂版(1954)に再録; "The Superego and the Theory of Social Systems", *Psychiatry*, 15, 1952. のちに *Working Papers* に、さらに *ibid.* (1964) の第一章に再録; *Family: Socialization and Interaction Process*, Free Press, 1955 (with R. F. Bales); "Psychoanalysis and Social Science", in F. Alexander and H. Ross, eds., *Twenty Years of Psychoanalysis*, Norton, 1953; "The Incest Taboo in Relation to Social Structure and the Socialization of the Child", *British Journal of Sociology*, 5, 1954, のちに *ibid.* (1964) 第三章に再録; "An Approach to Psychological Theory in Terms of the Theory of Action", in S. Koch, ed., *Psychology: A Study of a Science*, Vol. III, McGraw-Hill, 1959. などがある。

51) Parsons, "Social Structure and the Development of Personality", in his *op. cit.*, pp. 79-80.

52) T・パーソンズ『行為の総合理論をめざして』永井ほか訳、日本評論新社、1960、386ページ。

53) Parsons, "Social Structure and the Development of Personality", in his *op. cit.* p. 80.

54) T. Parsons, R. F. Bales & E. A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, Free Press, 1953, pp. 63 ff.

55) Parsons & Bales, *The Family*, Routledge, 1956, pp. 35 ff.

56) ライト・ミルズ『社会学的想像力』鈴木訳、紀伊国屋書店、1965、208—209ページ。

57) Parsons, "Superego and the Theory of

- Social Systems”, in his *op. cit.*, pp. 18-19.
- 58) ヒューズ, 前掲書, 193—194ページ。
- 59) H. Gerth & C. W. Mills, *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions*, Harbinger Books edition, Harcourt, 1964, pp. xvi-xvii.
- 60) 高橋・富永・佐藤『社会心理学の形成』(今日の社会心理学 I), 培風館, 1965, 338—339ページ。
- 61) Gerth and Mills, *op. cit.*, pp. xiv-xv.
—1965. 9. 23—